

道元禅師の知られざる日常

愛知学院大学准教授

菅原研州

道元禅師はどういう人物か？ (1)

- 1200年京都生まれ。
- 父は大納言・源通具。
- 8歳の時に母が亡くなって仏道への志を持つ。
- 14歳4月に比叡山（天台宗）で出家。
 - ⇒ 「本来本法性、天然自性身」の言葉で疑問を持つ。
- 18歳で建仁寺（臨済宗）に移転。栄西の弟子・明全に師事。
- 24歳で中国留学。
- 26歳の時に天童如浄禅師の下で身心脱落、嗣法される。
- 28歳の時に帰国。しばらく建仁寺に寓居。

道元禅師はどういう人物か？ (2)

- 34歳、深草の興聖寺を開単（修行者受け入れ）。
- 44歳、越前に移転、吉峰古寺に寓居。
- 45歳、吉峰古寺から大仏寺に移動、翌年に開単。
- 47歳、大仏寺を永平寺に改名。
- 48歳、鎌倉に行化し、執権・北条時頼と会談。
- 53歳10～11月頃、病に倒れる。
- 54歳（1253年）の7月14日、永平寺の住持を懷辨禅師に譲る。
- 8月28日、京都の俗弟子覚念の私邸で遷化。
- 9月12日、永平寺で入般涅槃の儀を執行。

純粹禪という虚構

- 明治時代以降の道元禪師へのイメージは、非常に高潔なものとなった。
- きっかけの1つは和辻哲郎博士（1889～1960年）の「沙門道元」（『日本精神史研究』所収）。
- 和辻博士は、道元禪師を「反権力」「貧」「孤高の宗教者」といった性格付けを行う。
- しかし、その根拠は、道元禪師の著作に基づくのではなく、白樺派の理想主義の影響か？
- 道元禪師の禪は純粹という虚構的独断。

今回の講義の主題

- ①道元禅師の著作の簡単な解題。
- ②道元禅師の知られざる日常を紹介。

道元禅師の著作解題

※自身の著作

- 『弁道話』 (1231年)
- 『普勸坐禅儀』 (天福本 [1233年] ・ 流布本)
- 『学道用心集』 (1234年)
- 『正法眼蔵』 (1233～53年だが、主は1239～45年)
- 『永平清規』 (1237～46年頃、全6編)

※説法の記録

- 『正法眼蔵随聞記』 (嘉禎年間 [1235～38年])
- 『永平広録』 (1226～52年、全10巻の語録)

和辻博士の問題点

- 道元禅師の性格を『学道用心集』『正法眼蔵随聞記』で判断。
- 上記2書は、30代に書かれた（説かれた）もので、寺院経営も軌道に乗っておらず、経済的に厳しい状況。
- 周囲の弟子達を精神的に鼓舞するような言葉が多く、「貧」に耐えようという呼びかけも多い。
- 結果、上記2書に則って定められた道元禅師の性格は、ストイックで、修行優先型で、経済的困難にも負けない、といった「禅僧然」とした様子となる。

道元禅師の実像を語る

- これ以降のお話しの結果、道元禅師の実像は、余りありがたくないと思う人が出るかもしれない。
- しかし、虚像を信じるのは、祖師本人では無い「何か」を妄信することになり、不健全。
- 実像を知った上で、更にその祖師の言葉や行いを理解して、初めて健全な学びといえよう。

道元禅師の知られざる日常（1）

- 永平寺の修行方法がほぼ定まった46歳以降の1日の生活。

⇒基本は1日3回（夜の始まり・夜の終わり・朝）の坐禅。

場合によっては4回（午後）の場合も。

⇒1日2回（朝（粥）・昼（飯））の食事。

場合によっては「薬石」という夕食を食べていた。

⇒寝場所は住職の居室（方丈）または僧堂。

僧堂の場合、他の修行者と一緒に睡眠。

道元禅師の知られざる日常 (2)

- 1ヶ月単位で見ると、5日に1度、修行僧達の前で説法（上堂）
基本は5と10の日。
 - 上堂の翌日は質問や、追加説明（請益）の時間あり。
 - 請益の翌日は、修行僧にその時の境涯を回答させる問答（入室）の時間あり。
 - 3と8の日は夜に念誦（十仏名を唱える）
 - 4と9の日は入浴や浄髪し、それぞれ翌日の上堂に備える
- ⇒当時は5日周期の修行ペース。修行僧は5日に1度、公案（禅問答）を与えられていた。

道元禅師の知られざる日常 (3)

- 道元禅師は『永平広録』を読むとイメージが変わる。
- 修行僧達から超然としていたイメージは、『永平広録』には無い。特に巻10には100首を超える漢詩が収録されているが、こんな様子が見える。

冬夜に諸兄弟、志を言う、師、見て之に和す

二千一百有余歳、竺漢幾くか経法尚お残る、

仏祖の伝衣縦い遍界なりとも、憐れむべし冬夜の水雲寒し。

『永平広録』 巻10-偈頌76

道元禅師の知られざる日常（4）

- 弟子達の様子を見ていて、細かく指導。

去年の冬間、特に兄弟に示す。もし、堂内・廊下・溪辺・樹下において兄弟相見すれば、処ごとに互いに相い合掌低頭して如法に問訊すべし。然る後に説話せよ。

未だ問訊せざる前、大小の要事を相い語ることを許さず。永く恒規となすべし。是、仏祖相見の家常茶飯なり。仏祖、豈に礼儀無からんや。

『永平広録』 卷2-133上堂（1245年の秋～冬頃）

道元禅師の知られざる日常 (5)

- 涙もろい。中国で修行中に初めて見た修行法に感動。

予、在宋のそのかみ、長連牀に功夫せしとき、齊肩の隣単をみるに、毎暁の開静のとき、袈裟をささげて頂上に安置し、合掌恭敬しき。一偈を黙誦す。ときに予、未曾見のおもひをなし、歡喜、みにあまり、感涙、ひそかにおちて衣襟をうるほす。 『正法眼蔵』
「伝衣」巻

⇒弟子の僧海首座が亡くなったときには大泣き。

亡僧、僧海首座の為の上堂。

彼の終焉の頌を拵するに曰く「二十七年、古債、未だ転ぜず。虚空を踏翻して、投獄すること箭の如し」と。

師、拵し了って云く、夜来、僧海枯れぬ。雲水、幾くか嗚呼す。徹底、汝、見ゆと雖も、胸に満る涙、湖を鎖す。昨に一払を拵じて魂魄を打つ。一語、臨行して蘇を待たず、と。

『永平広録』 卷1-111上堂

和辻博士の見解への反駁（1）

⇒ 「孤高の宗教者」は反駁したので、残り2つを見ておきたい。

- 「反権力」についてだが、道元禅師の生家は村上源氏であり、祖父・源通親は内大臣にまで登り、一族は承久の乱の影響を受けたものの、その後、後嵯峨天皇・後深草天皇の下で権力を回復。道元禅師自身は即位したばかりの後深草天皇のため宝治元年（1247）6月に「聖節の上堂」を行い、天皇誕生日を祝った。「反権力」は、当たっていない。

和辻博士の見解への反駁（2）

- 「貧」についてだが、京都興聖寺、越前永平寺ともに、経営が軌道に乗ってからは「貧」を説かなくなった。

⇒『正法眼蔵』 「看経」 卷では、檀越（在家信者）に対し、僧侶を供養するための「沈香」を自ら用意するように主張。

⇒同じく「洗面」 卷では、「ねがはくは、摩黎山の梅檀香を、阿那婆達池の八功德水にてあらひて、三宝に供養したてまつらんことを」とし、お香や水のブランド・産地を指定。

⇒建長元年（1249）12月に永平寺開基・波多野義重から大蔵経を寄進するという手紙が来たときには、大喜び（『永平広録』 卷5-361・362上堂）。

道元禅師はどういう人だったのか？

- 孤高の宗教者ではなく、弟子達と一緒に漢詩を詠む。
- 反権力でもないし、しっかりとした檀那（在家信者）が付いてからは、「貧」も説かない。
- 涙もろい。京都興聖寺で弟子の僧海首座が亡くなったときには、大泣きした。
- しかし、それは後進の教育に熱心だったことの裏返し。
- 修行熱心だったことも疑いないが、そこまで厳しい生活をしているわけではない。常識の範囲内。